

もろはしてつじ ころぎ しんそうばん
 諸橋轍次著「論語の講義<新装版>」大修館書店 1973 年 9 月 10 日刊を読む

がくじだいいち
 学而第一

1. 子曰く、學^{まな}びて時^{とき}に之^{これ}を習^{なら}ふ、亦^{また}た説^{よろこ}ばしからずや。
2. 朋^{とも}有り遠^{えん}方^{ぽう}より来^{きた}る、亦^{また}た樂^{たの}しからずや。
3. 人^{ひと}知^しらずして 搢^{いきどほ}らず、亦^{また}た君子^{くんし}ならずや。

1. (1) 孔子言う、学問をして、その学んだところを機会ある毎に復習し練習して行くと、学んだところがおのずから真の知識として我が身に体得されて来る。これはまたなんと愉快的ことではなかろうか。
- (2) このようにして修養を積むと自然、共鳴者、又は同志の者が出来て、遠い所からまで慕い訪ねて来るようになるであろう。これはまたなんと楽しいことではなかろうか。
- (3) 又自己の学習により友との切磋^{せつさ}によって磨かれる学問は、終には真の徳操^{とくそう}となつて、分^{ぶん}に安んじ命^{めい}に立つ所まで進まなければならない。この境地に至れば、すでに世の毀誉褒貶^{きよほうへん}は問うところではない。たとい世人が自分の学徳を認めてくれなくとも、これを怨^{うら}まず咎^{とが}めず、平然として世に処することが出来るであろう。この点まで進み得た人であれば、これこそ真に修養の出来た君子人というべきではなかろうか。
2. (1) この章は学習上の三段階を述べた個々の教ではあるが、その中に又一貫した条理も認め得るように思う。
- (2) 第一節に述べる自己の学習が出来上れば、必ず志を同じくする同志は来り集まるものである。そこに第二節の意義がある。
- (3) しかし人生は必ずしも順路のみとは限らず、いかに自己の修養が出来ても、世人がこれを認めず、或は誤解し、甚だしきは曲解する場合もあるであろう。かかる場合に処してなお且つ自己の徳操^{とくそう}を信じ、分^{ぶん}に安んじ命^{めい}に立つところがなければならない。これが第三節の意義である。
3. (1) これを孔子の一生について見ると、孔子は生まれながらにして知ると言われるほどの聖人ではあったが、しかも十有五にして学に志し、常に学んで厭^{いと}わざる努力を続けた。これが孔子の学習であった。

(2)その結果、多くの門人も集まり同志も得た。人の推すところとなって魯国の君に用いられ、その経綸けいりんを行ったこともある。これが孔子の有朋である。

(3)しかし又、君に疏うとんぜられ、位を失ったこともあり、天下周遊の途次には、生命の危険にさらされたことも一再ではなかった。かかる逆境においても、孔子は常に分に安んじ命に立ち、われ五十にして天命を知る(爲政、四)と言っている。これが孔子の人知らずして慍いんらざる徳操であった。

4. (1)かくて七十余年の生涯を通じて、孔子は論語開卷第一の教訓を自己の一身において実現したのである。

(2)なお上述の命を知ることが、学問終極の目的であり、且つ人間修養の極致であるとされているが、論語の最後の章(堯日、三)に、命を知らざれば似て君子爲ることなしとあり、ここに論語編纂における首尾一貫の態度を見ることが出来るとする人もある。

5. (1)「子曰」の「子」は、元来、男子の美称であるが、転じて師に対する代名詞としても用いられた。論語は主として直弟子によって記録された孔子の言行を編纂したものであるから、単に「子」といえば孔子を指す。

(2)「學ぶ」とは、先輩に聞き典籍について新しく知識を得ること。

(3)「時に之を習ふ」とは、時に当って幾度も練習実習すること。「習」の字は、雛鳥が巣立ちをする前にしばしば羽ばたきの稽古することで、従って自習を続ければ、学んだことが実行にも移されるのである。

(4)「不亦…平」は、それはなんと…ではないかとの意。これは疑問の形を用いて結論を強く打ち出す形式であり、その場合の亦には感嘆の意味がある。

(5)「説」は、「悦」に同じく、心によろこびを感じること。これに対して後の「樂」の字は、よろこびが外に発すること。「朋」は、師門を同じくする人をいうが、又志を同じくする人にも通じて用い、時には門人をも指す。「慍」は、心の中に怒りを含むこと。「君子」は、学徳の出来上がった人をいう。

P1 ～ 3

[コメント]

30 年を要して全 13 巻の「大漢和辞典」をまとめ上げた諸橋轍次先生もろはしてつじの「論語の講義」。孔子の教えを弟子たちがまとめた「論語」の第一章「学需第一」は、「学習」の真髓が 32 文字に集約されている。「自己学習」、「有朋」、「人知らずして慍らざる徳操」の意味をかみしめたい。志高く生きる人の座右の書、古典の中の古典。是非、この夏、499 全章の通読を。

— 2014 年 7 月 28 日 林 明夫記 —